1　講演会・フォーラム等による研究成果の公開

［概　要］

歴博は，研究の実施状況を広く内外に公開するためにさまざまな催しを行っている。主要なものとしては，歴博講演会・くらしの植物苑観察会・歴博フォーラム・歴博映像フォーラム・歴博映画の会・展示解説や，総合展示・企画展示の関連イベントがあげられる。また歴史系総合誌『歴博』の編集刊行を多年にわたって継続している。こうした催しや刊行物を通じて，研究者のみならず一般の方々にも歴博の活動に興味と関心を持っていただくことを目的として，総合資料学に基づく研究活動とその成果の発信を行っている。

本年度は，歴博講演会８回，くらしの植物苑観察会11回，歴博フォーラム３回，歴博映像フォーラム１回，民俗研究映像アンコール上映会２回，展示解説，総合展示・特集展示・企画展示関連イベントを開催しており，研究成果の発信と周知，それに対する応答や検証を行うことによって，各活動の改善をはかっている。

広報連携センター長　齋藤努

［講演会・フォーラム等］

歴博講演会　不定期の第２土曜日13:00～15:00　国立歴史民俗博物館講堂にて

当館教員や館外の研究者が，自らの研究分野の最新情報を一般の聴講者にも分かり易く発表する。不定期の第２土曜日に本館講堂で実施し，2019年度は８回開催した。

開催日程・演題・講師については「第二部　事業編　Ⅸ　広報・普及　２　歴博講演会」を参照。

くらしの植物苑観察会　毎月第４土曜日13:30～15:30（８月は，10:00～12:00，12月は第３土曜日）　くらしの植物苑にて

くらしの植物苑は，生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し，素材となった植物と博物館の展示資料を関連づけ，歴史への理解を深めることを目的として，1995年９月に開設した。観察会は，一般の方を対象に実施し，四季折々の植物を観察し，人と植物とのかかわりについての理解を深めている。毎月原則第４土曜日にくらしの植物苑で実施し，2019年度は11回開催した。

開催日程・演題・講師については「第二部　事業編　Ⅸ　広報・普及　４　くらしの植物苑観察会」を参照。

歴博フォーラム・歴博映像フォーラム等

第110回歴博フォーラム

「新しい歴博の先史・古代総合展示について」　　2019年６月15日（土）

主　催　国立歴史民俗博物館

会　場　国立歴史民俗博物館講堂

参加者　215名（定員　260名，申込み人数　317名）

１．開催趣旨

総合展示第１室「先史・古代」（2019年３月19日リニューアルオープン）の関連事業で，２部構成で行う。第１部では，館内の展示担当者がそれぞれのテーマの展示内容の特質と見所を述べる。第２部では，外部の展示プロジェクト委員を司会に，今回の新構築が，先史・古代研究にしめる意義と位置づけを議論する。

特に後者では，今回の新構築を機に，先史・古代研究をどのように高度化しているのかについて議論する。

２．開催内容

10:00	開会の挨拶	久留島　浩（国立歴史民俗博物館長）
第１部	総合展示第１室先史・古代の見所	
10:10	Ⅰ　最終氷期に生きた人々	工藤雄一郎（学習院女子大学国際文化交流学部）
10:40	Ⅱ　多様な縄文列島	山田　康弘（国立歴史民俗博物館）
11:10	Ⅲ　水田稲作のはじまり	藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）

11:40　Ⅳ　倭の登場　上野　祥史（国立歴史民俗博物館）
（昼休み）
13:00　Ⅴ　倭の前方後円墳と東アジア　松木　武彦（国立歴史民俗博物館）
13:30　Ⅵ　古代国家と列島社会　林部　均（国立歴史民俗博物館）
14:00　沖ノ島　高田　貫太（国立歴史民俗博物館）
14:15　正倉院文書　仁藤　敦史（国立歴史民俗博物館）
（休憩）
第２部　歴博先史・古代展示の研究上の位置づけ
14:45　パネルディスカッション
司会　設楽　博己（東京大学大学院）
菱田　哲郎（京都府立大学文学部）
パネラー　工藤，山田，藤尾，上野，松木，林部，高田，仁藤
16:00　質疑応答
16:30　終了

総合司会　藤尾　慎一郎（国立歴史民俗博物館）

３．総　括

第一部では，８つのテーマ内容について，展示の意図や根拠などを中心に展示担当者から説明を行った。とくに，６つの大テーマの切れ目と時代区分との関係や，時代と時代の移行期を重視していかに表現するのかに，苦心した点などが発表された。

第二部では，Ⅰ～Ⅲまでの先史と，Ⅳ～Ⅵ，沖ノ島，正倉院文書に分けて，司会者からの質問に受ける形で，今回のリニューアルで示された展示内容の研究上の位置づけについて議論した。

とくに，先史時代の展示が，歴博の研究成果である炭素14年代測定結果に基づいた高精度な較正暦年代を基準とした年代観によって，国内では初めておこなわれたことや，縄文時代の穀物は現状では紀元前11世紀のコメ圧痕が一つしかないことを明らかにしたレプリカ法の研究成果を展示で示したことなどをあげることができる。

また原史・古代の展示について，日本列島の社会統合や国家形成が東アジア諸地域との絶えまない交流によって進められた点が強調されると同時に，古墳時代に墳墓をとくに大規模に築くことや，奈良時代に確立する都城の特性など，その中での日本列島社会の個性やその要因についても議論が深まった。

全体として，時代から時代への過渡期の積極的評価，および国際関係や列島の南北地域への着目など，今回のリニューアルで展示方針として重きを置いた点が，そのまま日本列島の先史・古代史の新しい展開に寄与することが再認識されたことは重要な成果と判断できる。

第111回歴博フォーラム

「伝統の朝顔20年の歩み」　2019年８月17日（土）

主　催　国立歴史民俗博物館
会　場　国立歴史民俗博物館講堂
参加者　234名（定員　260名，申込み人数　295名）

１．開催趣旨

くらしの植物苑特別企画「伝統の朝顔」は，1999年に第１回が開催され，2018年に20回目を迎えた。そこで，2019年は開催20周年を記念して，苑内での特別企画，本館第３展示室での特集展示「伝統の朝顔」，講堂での歴博フォーラムを合わせた記念イベント「伝統の朝顔20年の歩み」を開催する。それら一連のイベントの中で，歴博フォーラムでは朝顔の色と形，特別企画開催のきっかけ，文献史料と浮世絵からみた朝顔について報告し，最後に質疑応答をおこなう。

２．開催内容

13:00　開会の挨拶　久留島　浩（国立歴史民俗博物館長）
13:10　「くらしの植物苑特別企画『伝統の朝顔』の始まり」　辻　誠一郎（東京大学名誉教授）
13:45　「変化朝顔の起源を探る」　仁田坂英二（九州大学大学院・理学研究院）

14:20	「DNAで紐解く黒白江南花の謎」	星野　　敦（基礎生物学研究所）
14:55	（休憩）	
15:05	「浮世絵版画からみた朝顔」	日野原健司（太田記念美術館）
15:40	「書物に見る江戸の朝顔」	平野　　恵（台東区立中央図書館）
16:15	質疑応答	
16:25	閉会の言葉	青木　隆浩（国立歴史民俗博物館）
16:30	終了	

３．総　括

第111回歴博フォーラムは，くらしの植物苑の特別企画「伝統の朝顔」開催20周年を記念して，くらしの植物苑での展示「新しい朝顔」，本館第３展示室特集展示「伝統の朝顔」と合わせ，「伝統の朝顔20年の歩み」と題して開催した。フォーラムでは，「伝統の朝顔」の企画を立ち上げた頃の話を辻誠一郎氏に，植物学・遺伝学の分野からおもに変化朝顔の形についてのことを仁田坂英二氏，朝顔の色についてのことを星野敦氏に，さらには歴史学の分野から浮世絵に描かれた朝顔についてのことを日野原健司氏，書物で紹介されている朝顔についてのことを平野恵氏にそれぞれ講演していただいた。

講堂はほぼ満員の状態で，申込人数に対する入場者数が79.3%，入場者数に対するアンケート回収率が70.1％といずれも高い割合を示した。満足度も高く，「よかった」73%と「どちらかというとよかった」23%を合わせると96%にものぼった。フォーラムの内容に対する意見をみても，「楽しかった」，「素晴らしかった」，「興味深かった」，「また企画して欲しい」といった好意的なコメントが多かった。

その後の８月24日（土）に開催された仁田坂英二による観察会「新しい朝顔」でも150人もの参加者があり，特別企画開催中の入苑者も4,953人（１日平均134人）と昨年の4,631人（１日平均125人）を上回る盛況ぶりであった。あらためて，変化朝顔の人気を再確認できたと思う。また，今年度は読売新聞や朝日新聞，東京新聞のほか，ＮＨＫの「趣味の園芸」や日本農業新聞で取り上げられるなどマスコミでの露出が多く，かつ園芸文化協会がチラシを積極的に配布してくださったこともあって，注目度が高くなったのだと思われる。開催した側としても満足度の高いイベントとなった。

歴博映像フォーラム14

「からむしのこえ―福島県昭和村のものづくり―」　2019年10月19日（土）

主　催　国立歴史民俗博物館
会　場　国立歴史民俗博物館　講堂
参加者　238名（定員　260名，申込み人数　303名）

１．開催趣旨

本年度の映像フォーラムでは，福島県大沼郡昭和村における「からむし織」を対象として制作した研究映像を紹介する。からむしはイラクサ科の多年草であり，その繊維は縄文時代より利用されてきた。昭和村のからむし栽培は，記録資料によると1756年には始まっていたことが確認されている。昭和村では，重要無形文化財である越後上布や小千谷縮の原料を供給する目的でからむしを栽培してきたが，近年では後継者不足という課題に直面している。状況を打開するために1994年に村役場の主導で始まった「からむし織体験生制度」は，毎年数名の体験生を全国から募り，１年間の生活を補助しつつ，栽培から織にいたる工程を体験的に学ぶというもので，今年で26期目を迎えている。また，現在30名ほどの体験生が村に残り，様々な形でからむし文化の継承に協力している。全国のものづくりの現場が抱える問題を考えるうえで，昭和村の取り組みは，いくつものヒントを提供してくれるだろう。上映する映像は，伝統的な技術の記録にとどまらず，様々な立場でからむしにたずさわる人々の思いを継承するために制作したものである。本フォーラムでは，映像の上映とあわせて，関係者による講演をおこない，現代のものづくり，ならびに研究映像の可能性と課題について議論する。

２．開催内容

13:00	開会の挨拶	久留島　浩（国立歴史民俗博物館長）
13:10	趣旨説明「からむし文化の記録と継承に果たす研究映像の役割」	分藤　大翼（信州大学）
13:20	研究映像『からむしのこえ』	

（休憩）

15:10	講演１「ものづくりの記録と継承の課題」	分藤　大翼（信州大学）
15:25	講演２「会津学における映像の役割」	菅家　博昭（会津学研究会）
15:40	講演３「昭和村のものづくりの未来像」	鞍田　　崇（明治大学）
15:55	総合討論	
16:20	質疑応答	
16:30	終了	

総合司会：内田　順子（国立歴史民俗博物館）

３．総　括

研究映像「からむしのこえ」は，共同研究「歴史・民俗研究の資源としての映像の制作・保存・共有と歴博型プラットフォームの構築」（2016～2018年度，代表：内田順子）の成果であり，共同研究員の分藤大翼氏が監督・撮影し，同じく共同研究員の春日聡氏の撮影・録音・編集により制作された。

福島県大沼郡昭和村では，昔ながらの手仕事により，「からむし」の文化が受け継がれている。からむしは，イラクサ科の多年草であり，その繊維は縄文時代より利用されてきた。昭和村では近世中期から栽培されており，越後上布や小千谷縮の原料にもなっている。近年では，からむし文化の普及を目的とした独自の取り組みも行われている。研究映像「からむしのこえ」は，昭和村のからむし文化の現在を記録したものである。

監督した分藤氏は，おもにカメルーン共和国の熱帯雨林地域の狩猟採集民を研究する文化人類学者で，映像による研究成果を映像人類学の国際的な映画祭で発表するなどしている。春日氏は，インドネシアや日本をフィールドとする民族音楽学・文化人類学を専門とする研究者である。両者が共同制作することになったのは，これまでの歴博研究映像ではあまり実践されていないサウンドスケープに重点をおいた撮影・編集を行うためであり，今回の研究映像では，からむし生産の現場の環境や，地域の人びとの身体技術を，映像だけでなく，音によっても充分に記録することができた。

分藤氏の講演では，映像記録のプロセスが紹介され，「お茶飲みの時間」など，記録できなかったものの重要性について紹介された。菅家氏の講演では，かつて昭和村で行われており，現在は伝承が途絶えている麻織物について紹介された。麻とからむしをめぐる昭和村の技術伝承については，今回の研究映像では簡単にしか触れることができなかったので，菅家氏の講演でその点が補われた。鞍田氏の講演では，1990年代以降の社会の変化に伴い，昭和村のからむし生産をめぐる制度も変わらざるを得ない中で，からむし生産に直接携わった「人」の姿勢の重要性について触れられた。３者の講演は，研究映像「からむしのこえ」とのバランスがとれた内容であったことは，アンケートからもうかがうことができる。

定員をこえる申し込みがあったほか，昨年度実施した歴博映像フォーラム，「二五穴」に続き，撮影地から団体でフォーラムに参加された方々がおられ，地域の人びととの協力関係が充分に形成されていることがわかる。アンケートも概ね好意的であり，今後もさまざまなところでの上映を計画していきたい。

第112回歴博フォーラム

「中世益田の世界」　　2019年11月２日（土）

主　催　国立歴史民俗博物館
共　催　益田市・益田市教育委員会・石西の文化を学ぶれんげ草の会
後　援　島根県・島根県教育委員会
会　場　島根県芸術文化センター「グラントワ」小ホール
参加者　310名（定員　400名，申込み不要）

１．開催趣旨

2016～20年度に実施した歴博基幹共同研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」では，かつて長野荘と益田荘という荘園が存在した中世の高津川・益田川下流域社会を基軸事例として取り上げ，地域社会において中世武士の領主支配が受容された諸契機の究明を目的に掲げた。この目的に迫るべく，本共同研究では，当該地域に関わる豊富な中世の文献史料や出土遺物の調査はもとより，近世～近代に作成された絵図や地籍図の分析にもとづくフィールドワークや聞き取り調査も積極的に行い，中世の高津川・益田川下流域社会の様相の復元に取り組んだ。

本フォーラムは，３年間にわたるこれら調査研究の成果について，市民を対象に公表するものである。本共同研究で明らかにされた中世の高津川・益田川下流域社会の様相を，現地で暮らす市民にわかりやすく示し，市民が実感できる歴史像として提供することを目指す。

２．開催内容

10:00	開会の挨拶	久留島　浩（国立歴史民俗博物館長） 代理　田中大喜（国立歴史民俗博物館）
10:10	共催者挨拶	山本　浩章（益田市長）
Ⅰ　益田を訪れたモノと人		
10:20	「陶磁器からみた中世益田」	村木　二郎（国立歴史民俗博物館）
10:50	「河口の港が果たした役割―日本海と瀬戸内海―」	鈴木　康之（県立広島大学人間文化学部）
11:20	「益田と対馬をつなぐ海上交通路」	荒木　和憲（国立歴史民俗博物館）
（昼休み）		
Ⅱ　高津川流域の生業と流通		
13:00	「高津川・益田川河口域の中世」	田中　大喜（国立歴史民俗博物館）
13:30	「港としての角井と飯田」	松田　睦彦（国立歴史民俗博物館）
14:00	「中世俣賀の山林資源と領主たち」	渡邊　浩貴（神奈川県立歴史博物館）
（休憩）		
Ⅲ　長野荘領主の群像		
14:45	「材木の生産・流通と領主」	西田　友広（東京大学史料編纂所）
15:15	「石見国長野荘をめぐる諸領主の動向」	中司　健一（益田市歴史文化研究センター）
Ⅳ　パネルディスカッション		
15:45	司会：田中　パネラー：村木・鈴木・荒木・松田・渡邊・西田・中司	
16:20	閉会の挨拶	田中　大喜（国立歴史民俗博物館）

３．総　括

翌日に益田市内各地域の秋祭りを控えていたにも関わらず，310名もの参加者を得ることができた。参加者の大半が島根県・山口県・広島県在住の方々で，その過半数が，本フォーラムの開催を知ったきっかけがポスター・チラシと答えていることから，ポスター・チラシを島根県および隣接する各県に重点的に配布したことが奏功したと判断される。また，共催者の石西の文化を学ぶれんげ草の会が，益田市内で積極的に告知していただいたことも大きかったと思われる。

内容は，市民を対象にしたわかりやすいものになるように努めた。その甲斐もあり，アンケートでは85パーセントの方々から「よかった」という感想をいただくことができ，個別の感想を見ても「非常におもしろかった」という感想を多数いただくことができた。したがって，「共同研究の成果を市民を対象にわかりやすく伝える」という本フォーラムの所期の目的はほぼ達成できたと考える。

しかし，８本もの報告を用意したため，報告時間が一人30分以内となってしまい，「それぞれの時間が限られていて惜しまれる」という感想が複数寄せられた。成果が多岐にわたり，できるだけ多くのことを伝えたいと考えたためだったが，内容が拡散してしまったのも事実で，より深く知りたいと思う参加者には不満が残る内容となったことは否めない。この点は反省点として受けとめ，今後に活かしていきたい。

歴博研究映像「二五穴」アンコール上映会

2019年６月９日（日）・23日（日）

会　場　千葉県立中央博物館　講堂
主　催　千葉県立中央博物館
共　催　国立歴史民俗博物館
参加者　６月９日　31名・６月23日　33名　事前申し込み不要

１．開催趣旨

房総半島の灌漑用水路「二五穴」について，千葉県立中央博物館・国立歴史民俗博物館の包括協定に基づいて実

施された共同研究の成果を映像化した歴博研究映像を上映し，二五穴をめぐる歴史，技術，自然と，そこで暮らす人びとと二五穴の関係性を紹介する。

２．開催内容

６月９日

13:30　講演

島立　理子（千葉県立中央博物館）

西谷　　大（国立歴史民俗博物館）

15:00　終了

６月23日

13:30　映像上映

歴博研究映像「二五穴 ―この水はどこへ行くのか―」

歴博研究映像「二五穴 ―水と米を巡る人びとの過去・現在・未来―」

15:00　終了

３．総　括

６月９日の聴講者は31人で，アンケート（24枚回収）によれば，参加者の年齢層は，40代，50代，70歳以上が多かった（「20歳未満：１人，20代・30代：０人，40代：６人，50代：６人，60代：５人，70歳以上：６名」）。

当日は，体調不良により西谷大が登壇できず，島立理子の講演のみとなったが，「二五穴について今までよく知らなかった」（15人：約63%），「知っている内容が多かった」（２人：約８%），「まあまあ知っていた」（７人：約29%）という聴講者に対し，本講演によって「二五穴への関心が深まった」（22人：約92%）とする回答が最も多く，自由記述においても「二五穴に関してさらに知りたくなりました」などの感想が寄せられ，大変好評であった。

６月23日の聴講者は33人で，アンケート（19枚回収）によると，参加者の年齢層は，20歳未満・20代・30代：０人，40代：５人，50代：４人，60代：３人，70歳以上：７名となった。この日は，「二五穴」の歴史的経緯についての言語的説明を最小限に留めて編集した20分版と，ナレーションその他による説明を加えた40分版の２作品を上映した。映像の全体的な感想については，「よかった」（12人：約63%）とする人が最も多く，20分版と40分版とでは，「どちらもよかった」（10人：約53%）が最も多く，「40分版がよかった」（７人：約37%），「20分版がよかった」（１人：約５%），「どちらもよくない」（１人：約５%）と続いた。短・長，どちらも好評だったが，わかりやすいナレーションがあるものが，より好まれたようである。上映後におこなった西谷大・島立理子・内田順子と聴講者との質疑応答では，二五穴の歴史的側面や，測量技術に関する質問が多く寄せられ，二五穴の歴史的経緯について，より深い知識を求めて聴講している人が少なくないようだった。

民俗研究映像「からむしのこえ」アンコール上映会

2020年１月13日（月・祝）

会　場　福島県立博物館　講堂

主　催　国立歴史民俗博物館

共　催　福島県立博物館

参加者　264名（200名を予定）

１．開催趣旨

歴博研究映像「からむしのこえ」の上映を含む第14回歴博映像フォーラム（2019年10月19日開催）は，好評のうちに終了した。今後，からむし生産に関連する地域の博物館等での上映を企画・開催していく予定であるが，その初めとして，研究映像の撮影地である昭和村のある福島県での上映会を開催したい。福島県立博物館で開催することで，地元会津でものづくりに携わる方々にも参加いただける機会を提供し，研究成果の地元への還元をはかりたい。

２．開催内容

13:00　開場

13:00　主催者挨拶　　内田　順子（国立歴史民俗博物館）

13:40　映像上映「からむしのこえ」

（休憩）
15:30　座談会「会津のものづくりの未来像」
分藤　大翼（監督・信州大学）
春日　　聡（撮影・音響　国立歴史民俗博物館客員）
鞍田　　崇（明治大学）
16:30　会場からの声
16:45　終了

３．総　括

研究映像「からむしのこえ」は，共同研究「歴史・民俗研究の資源としての映像の制作・保存・共有と歴博型プラットフォームの構築」（2016～2018年度，代表：内田順子）の成果である。共同研究員の分藤大翼氏による監督・撮影，同じく共同研究員の春日聡氏による撮影・録音・編集で制作された。

からむしとは，イラクサ科の多年草で，その繊維は縄文時代より利用されてきた。福島県大沼郡昭和村では，近世中期から栽培されており，越後上布や小千谷縮の原料として利用されてきた。近年では，からむし文化の普及を目的とした独自の取り組みも行われている。研究映像「からむしのこえ」は，昭和村のからむし文化の現在を記録したものである。

今回の上映会は，昭和村のある福島県の県立博物館の共催で開催し，福島県立博物館の所在地である会津若松で，ものづくりに携わる人たちにも映像を見ていただき，ものづくりの未来像について，ともに考える機会を提供することを企図したものである。研究映像の上映と，分藤大翼氏・春日聡氏に加え，研究映像制作の協力者である鞍田崇・明治大学准教授の３名による座談会によって構成された。

前日に地元紙が開催を報じたこと，鞍田崇氏によるwebでの広報などにより，当日は予定していた上限200人を大きく超える264人が来場した。そのため，用意していた配布資料が足りなくなってしまったところは反省している。

アンケートも好意的であり，特に，音響についてのコメントが多く，ナレーションや効果音楽を廃したことで，からむし文化の伝承者の「声」を印象深く伝えることができたと考えられる。

歴博映画の会

【概要】

国立歴史民俗博物館では，日本の民俗と歴史に関する映像資料の制作と収集を行ってきた。民俗に関する映像制作にはふたつのカテゴリーがあった。ひとつは「民俗研究映像」で，当館の民俗研究系の研究者が，各々の研究対象を，専門的な視点から映像化するものである。1988年より制作を開始し，現在も継続している。もうひとつは歴博と文化庁が協議の上，「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の中から撮影対象を選び，一般向けにわかりやすい映像を記録する「民俗文化財映像資料」である。1984年より制作が始まり，2008年に至るまでに計25作品が制作された。当館ではこのほか，民俗学・歴史学関連の民俗誌映画・記録映画を収集・保管している。これらの映像を通じて民俗と歴史への知識と理解がより深められることを期待し，2007年度より，国立歴史民俗博物館友の会の協力を得て，「歴博映画の会」を開催して上映することとした。2019年度の開催は下記のとおりである。

【第33回歴博映画の会】

１．開催主体　主催：国立歴史民俗博物館，協力：国立歴史民俗博物館友の会
２．開催日時　2019年７月６日（土）13:30～15:30
３．場所　国立歴史民族博物館講堂
４．テーマ　『世界無形文化遺産　来訪神　仮面・仮装の神々』の現在―南西諸島を中心に―
５．上映作品　「甑島のトシドン」1979年，30分，民族文化映像研究所
　　参考　「石垣島川平のマユンガナシ」1982年，38分，東京シネマ新社
６．内容　甑島のトシドンは，鹿児島県薩摩川内市の下甑島に伝承される，正月に行われる行事である。大晦日の晩，長い鼻に大きな口の面，藁蓑，シュロやソテツの葉などを身に付けた姿のトシドンが，家々を巡り歩き，新年を祝う。子どもたちには，大声でおどかしたり，日頃の行いをただしたり，よい子になるよう諭したりする。そして，褒美としてトシモチと呼ばれる大きな餅を与え，帰っていく。今回の「来訪神：仮面・仮装の神々」は，すでにユネスコ無形文化遺産に登録されていた「甑島のトシドン」の拡張提案として登録されたものである。また，今回の無形文化遺産の対象ではないが，南西諸島の来訪神行事の多様性を考えるために，石垣島川平で伝承されるマ

ユンガナシの記録映画も上映し，解説する。
７．解説　内田順子　本館研究部民俗研究系
８．参加者　173人

【第34回歴博映画の会】
１．開催主体　主催：国立歴史民俗博物館，協力：国立歴史民俗博物館友の会
２．開催日時　2019年９月７日（土）13:30～15:30
３．場所　国立歴史民族博物館講堂
４．テーマ　九州最後の海底炭鉱―池島炭鉱―
５．上映作品　「海底炭鉱に生きる　池島からの報告」
RKB映画社，製作：柴田和男・成富泰通，企画：松島炭鉱，1983年，54分
６．内容　長崎県西北部に位置する旧池島炭鉱は，現在も坑内を見学できる国内唯一の炭鉱施設である。石炭産業は，1950年代中頃から，エネルギーの石油への転換と安価で良質な輸入炭の流入により，合理化と閉山を進めていった。そのような中，池島炭鉱は効率的な採炭を目指して当時最新の技術を導入し，1959（昭和34）年から営業出炭を開始した。この映画では，入坑前の坑員の様子から，坑道に入り，採炭現場である切羽（きりは）で炭層を削る作業，一酸化炭素を検知するシステムや坑道を引き上げた後の現場報告までを紹介している。しかし，池島炭鉱は2001年度に保護政策を打ち切られたことと，2000年２月に坑内火災が起こったことで経営難となり，2001年11月に閉山となった。
７．解説　青木隆浩　本館研究部民俗研究系
８．参加者　175人

【第35回歴博映画の会】
１．開催主体　主催：国立歴史民俗博物館，協力：国立歴史民俗博物館友の会
２．開催日時　2020年２月１日（土）13:30～15:30
３．場所　国立歴史民族博物館講堂
４．テーマ　『世界無形文化遺産　来訪神　仮面・仮装の神々』の現在―北陸・東北地方を中心に―
５．上映作品　「来訪神の今―ナマハゲ・アマメハギ・スネカ」2020年，65分，国立歴史民俗博物館
６．内容　2018年に日本各地の来訪神に関する10件の年中行事が「来訪神：仮面・仮装の神々」として，ユネスコの世界無形文化遺産に登録された。これらは，「仮面・仮装の異形の姿をした者が，『来訪神』として正月などに家々を訪れ，新たな年を迎えるに当たって怠け者を戒めたり，人々に幸や福をもたらしたりする行事」と位置づけられている。今回の登録は，2009年に甑島のトシドンが登録されたことを踏まえ，国内の類似の行事の一括登録という形で拡張提案したものである。ここではこれらの行事のうち，秋田県男鹿半島のナマハゲ，石川県能登半島のアマメハギ，岩手県大船渡のスナカなど，北陸・東北地方の「来訪神」を紹介する。これらの行事が今回，一括登録されることで，新たな意味が付与されていく過程と現地の様子を紹介していく。
７．解説　川村清志　本館研究部民俗研究系
８．参加者　156人

［展示解説］

総合展示・特集展示ギャラリートーク

一般を対象に，当館教員が総合展示や特集展示の内容について解説し，理解を深めてもらうことを目的とした企画で，主に特集展示の解説を中心に開催している。2019年度は17回開催された。

開催日程は「第二部　事業編　Ⅸ　広報・普及　３　総合展示・特集展示ギャラリートーク」を参照。

企画展示ギャラリートーク

一般を対象に，当館教員及び館外研究者が，企画展示内容について解説し，理解を深めてもらうことを目的とした企画である。2019年度は会期中の土・日曜日を中心に７回行われた。

開催日程は「第一部　研究編　Ⅱ　資料の収集・研究成果の公開　―博物館資源センター―　２　展示　企画展示」のうち各企画展示の関連行事を参照。

［特集展示・企画展示関連イベント］

特集展示『もののけの夏―江戸文化の中の幽霊・妖怪―』の関連イベントとして，体験型イベント「錦絵カードを作ろう」と「オリジナル妖怪を描こう」を，企画展示『ハワイ―日本人移民の150年と憧れの島のなりたち―』の関連イベントとして，「ハワイ　コーヒーセミナー」と体験型イベント「アロハシャツ塗り絵」を開催した。

・「錦絵カードを作ろう」　（5,000件）
「オリジナル妖怪を描こう」（1,750件）
2019年７月30日（火）～９月８日（日）　企画展示室入口前　合計参加者数　6,750人

・「ハワイ　コーヒーセミナー」
協力：UCC上島珈琲株式会社
2019年11月３日（日）　１回目：11:00～12:30，２回目：14:00～15:30
ガイダンスルーム内　合計参加者数　48名（各24名）

・「アロハシャツ塗り絵」（200件）
2019年10月29日（火）～12月26日（日）たいけんれきはく内　参加者数　200人